

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：32636

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21730644

研究課題名（和文）アメリカ・リベラル改革の市民性教育と民主主義—デューイの学校論の実践的展開—

研究課題名（英文）Citizenship Education and Democracy in the Liberal Reform: John Dewey's Theory of Schools and Its Practice

研究代表者

上野 正道 (UENO MASAMICHI)

大東文化大学・文学部・准教授

研究者番号：50421277

研究成果の概要（和文）：本研究は、1920年代から30年代にかけてのジョン・デューイが探究した市民性教育の理論とその実践的影響を、リベラリズムの再構築と再概念化の角度から考察し、民主主義と公共性に立脚した彼の学校改革の展開過程を明らかにするものである。なかでも、教育をめぐる改革が自由放任から福祉国家へと移行するリベラリズムの転換期において、そのような趨勢とは異なるコミュニティ論の視角から、市民性と民主主義の教育を探究したデューイの学校改革の実践的展開を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to clarify John Dewey's theory and practice of citizenship education and to design the vision of innovative school reforms based on the principle of democracy and publicness by focusing on the reconstruction and redefinition of classical liberalism in the 1920s and 30s. I analyzed how Dewey's theory and practice of citizenship and democratic education had developed during the shifting period of liberalism from laissez-faire to welfare-state. I concluded that Dewey's perspective was completely different from the dominant liberalism in that he emphasized the importance of building communities in schools.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：シティズンシップ 民主主義 学校 進歩主義

1. 研究開始当初の背景

現在のグローバル社会の進展と併行して、リベラリズム、民主主義、市民性の教育に関わる学術研究が活発に探索される中で、「生き方としての民主主義」を提示したデューイの教育思想の評価が上昇している。だが、先行研究では、1920年代と30年代の彼の学校

構想の具体的な実践については、十分に明らかにされ、焦点化されてきたとは必ずしも言えない。

私は、これまでの研究で、この時期のデューイの公教育思想に関する哲学的な考察を行ってきた。これによって、デューイの公教育思想が市場と国家の含み持つ権力の倨傲

と希薄化した関係性の規範を内在的に批判したことで、公共性概念が等質的な価値と関心に充たされた閉域的な空間ではなく、開かれた人称関係を基礎とした多元的なアソシエーション空間を意味していたことを明らかにした。しかしながら、これまでの研究では、デューイの公教育思想が与えた学校改革の実践的影響とかかわりについては検討することができなかった。

したがって、本研究の背景として、現在、世界規模で要請されている民主主義と市民性の教育の主題を概念的な理論研究と実践的な事例分析からアプローチし、それを教育学における最先端かつ高度な水準の研究へと卓越させる必要性が存在することが指摘できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1920年代から30年代のデューイの市民性教育とその実践的影響を、リベラリズムの再構築の角度から考察し、民主主義を基盤とした学校改革論の実践的な展開を明らかにすることにある。すなわち、自由放任から福祉国家への移行期に相当するリベラリズムの分水嶺において、それとは異なる方向性でもって民主主義と市民性の教育を志向したデューイの改革構想の実践的展開を検討した。

従来の研究では、市民性、リベラリズム、民主主義、権利、国家といった要素が自然で相互に整合的に結び付くことが前提にされ、デューイの教育思想は個人主義に傾倒したリベラリズムの視角から分析される傾向があった。これに対して、本研究は、彼の市民性教育の基底に、人と人との関係的・互恵的なアソシエーションとコミュニティを捉えた。その上で、1920年代と30年代というリベラリズムの新たな段階を画する転換期において、デューイがその趨勢にどのように対峙し、市民性教育の実践をどのように準備し展開していったのかを考究した。

これによって、本研究は、現在、国際舞台で切望されている民主主義と市民性の教育に関わる研究を最先端かつ高度な学術水準において遂行し、日本における教育・学校・学習に関する研究の発展に積極的に貢献しようと試みた。

3. 研究の方法

本研究では、以下の4つの研究方法を採用した。

第一に、民主主義と市民性の教育に関わる概念的・基礎的なフレームワークを構築したことである。先行研究では、リベラリズム、民主主義、国家、市民権が整合的で予定調和の関係にあることが前提にされ、デューイはリベラル民主主義の代表的思想

家のひとりとして解釈されてきた。一方で、本研究が着目するのは、彼がリベラリズムの臨界を人と人との間で網の目状に生成される相互行為の関係的・互恵的な領域において捉え、協同的なアソシエーションの角度からその空白を縫合しようとした点である。すなわち、趨勢的なリベラリズムが市民性概念を個人的達成の次元や国家との関わりから定義するのは対照的に、本研究は、それらを創出するアソシエーションの協同と対話の意義を強調する。これによって、本研究は、リベラリズムを他の概念と融合的に解釈し、個人主義に傾倒したリベラリズムの内側でデューイを受容してきた従来の研究に対して再検討を迫り、市民性教育に関わる新たな概念的パラダイムの構築を強力に進展させることを試みた。

第二に、学校改革の豊富な事例分析を行い、市民性教育の実践的なプログラム開発を考察することである。1980年代以降のデューイ再評価の動向は、政治学、社会学、教育学、心理学など、領域横断的な形で展開されている。だが、それらの研究では、デューイの教育実践的なかわりと影響を学校の事例に即して考察する課題は追究されていない。本研究は、エルシー・クラブのロジャー・クラーク・バラード・メモリアル・スクールやアーサー・デール・コミュニティ・スクール、トマス・ジョーンズのハンプトン・インスティテュートをはじめ、学校の事例分析を行った。これらの学校は、デューイ自身が直接訪問したり、著書や論稿や書簡の中で記述したりしている学校である。各学校のカリキュラムや方法に関する資料を渉猟し詳細に検討するのは本研究が最初の試みであり、従来の教育史・教育思想史研究の空白部分を埋める独創的で重要な研究方法であるとともに、それらの実践を歴史的に辿ることは現在の市民性教育のプログラム指針の開発にも甚大なインパクトを提供することになる。

第三は、市民性教育の主題に関して、思想、実践、政策の多層的・複合的な展開過程を叙述することである。先行研究は、市民性概念を、制度的な行政機構のレベルで捉えるか、あるいは思想的、哲学的なレベルで分析する傾向が見られた。一方で、民主主義と市民性の教育をカリキュラムや実践の創造過程にかかわる学校空間の中に見る研究は、萌芽的・生成的な段階に留まっていた。個々の学校の実践レベルからカリキュラム改革へつなぐ市民性教育の実際と政策の多層的・複合的な展開過程を考究する本研究の試みは、教育学における先端的な研究方法の開拓に積極的な貢献を果たすと同時に、思想、実践、政策を節合する最先端かつ卓越した研究潮流の推進役を担う

ものとなる。

第四は、デューイのリベラリズムと市民性教育の概念形成について、とりわけヨーロッパやアジアの研究と交差させて積極的な研究交流を推進する視角を採用したことである。すなわち、ドイツのケルン大学デューイ研究センターや中国の復旦大学デューイ哲学研究センター、オランダ・プラグマティズム協会、北欧プラグマティズム・ネットワーク、フェデリコニセナポリ大学デューイ研究所などと交流を行い、デューイのリベラリズムと市民性教育思想の形成にかかわるヨーロッパ哲学やアジア的な視点との交流を積極的に展開しようとしたことがあげられる。

4. 研究成果

本研究は、1920年代から30年代にかけてのデューイが従事した学校改革の実践系譜が、趨勢的なリベラリズムの桎梏から民主主義の可能性を解放し、リベラリズムの批判領域としての市民性教育の確立と拡充を探索していった方略と実像を思想、政策、実践の多層的、複合的な展開過程の角度から明らかにした。なかでも、人と人との交流とかかわりが生み出す信頼関係、互惠性、ネットワークを基礎としたデューイ的な市民性教育の実践と、中産階級の生活を至上価値として生活適応と効率性を迫る中等教育改造審議会のカリキュラム改革の系譜は、この時期のリベラル改革の双璧を形成していた。

本研究がデューイの市民性教育の実践を研究主題とする方法的視角として、戦後の福祉国家の建設へと連なるリベラル民主主義が成立する前後の1920年代と30年代における彼の学校改革の実践的な構想と様態を捉えることによって、市場・選択・競争の原理に立つ今日のネオ・リベラリズムに対する批判的、発展的視座を獲得し、民主主義に立脚した市民性教育を再構築するための新たな方略とヴィジョンを開くことが存在した。

そこで、デューイが、市民性と民主主義の教育を志向して、「公共的行為のエージェンシー」としての学校を開拓しようとしたことを明らかにした。そのプロセスは、対話、協同、信頼に根差した、新たな民主主義の教育の形成を意図したものであったことを考察した。その流れは、1930年代の「ソーシャル・フロンティア」の学派を準備する一方で、デューイの市民性教育はそこから一定の距離を保持していたことを指摘した。

本研究において、重点を置いて着手したのは、デューイと進歩主義学校という研究テーマを、アメリカ国内の先行研究や資料に限定

して調査するのではなく、ヨーロッパやアジア的な視点を交差させて明らかにすることであった。ドイツのケルン大学デューイ研究センター（2011年2月）、ウィーン大学とロンドン大学（2011年8月）、ブリティッシュ・コロンビア大学、復旦大学デューイ研究センター（2012年8月）、ルクセンブルク大学、アムステルダム自由大学、コペンハーゲン大学、北欧プラグマティズム・ネットワーク（2013年3月）などを訪問し、市民性と民主主義の教育に関する最先端の研究に触れ合うことができた。

本研究の意義は、現在、国際舞台で切望されている民主主義と市民性の教育にかかわる研究を最先端かつ高度な学術水準において遂行し、日本における教育・学校・学習に関する研究の発展に積極的に貢献しようとしたことにある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ①上野正道「コミュニティと教育——共同性／協働性／協同性は教育に何をもたらすのか？——」『近代教育フォーラム』第21号（査読無）、2012年、171～179頁
- ②上野正道“Elsie Ripley Clapp and the challenge of community education: Building ethical and collaborative schools in progressive era,” 『人文科学』第17号、大東文化大学人文科学研究所（査読無）、2011年、33～46頁
- ③上野正道“Designing school reform based on community: Towards the construction of collaborative and communicative learning,” 『教育学研究紀要』第1号（査読無）、2010年、141～157頁
- ④上野正道「学習コミュニティに基づく教師教育の創造——教師の専門性の議論を手がかりにして——」『日本デューイ学会紀要』第50号（査読有）、2009年、45～54頁
- ⑤上野正道“John Dewey’s design of the school as a community of learning: Developing integrated curriculum based on experience,” 『経済文化研究所紀要』第14号（査読有）、2009年、205～220頁
- ⑥上野正道「公共的行為のエージェンシーとしての学校の創造——ソーシャル・フロンティアとデューイ——」『幼児教育学研究』第16号（査読有）、2009年、22～32頁

〔学会発表〕（計4件）

- ①上野正道「学校の公共性と民主主義——デューイの美的経験論へ」日本カリキュラム学

会第4回研究集会、2013年3月23日、上智大学

② 上野正道「民主主義社会の(再)構築に向けたカリキュラム論の探究(1):D.マイヤー著『学校を変える力』の合評を通して コミュニティ論の観点から」日本カリキュラム学会第23回大会課題研究、2012年7月7日、中部大学

③ 上野正道、上村浩子、鍵渡香代子「子育て支援の現状と課題」日本幼児教育学会第18回大会シンポジウム、2010年9月4日、駒沢女子短期大学

④ 上野正道、成田恭平「学習経験に基づくカリキュラム構成——教科の関係性を中心に——」関係性の教育学会第8回年次大会、2010年6月27日、大東文化大学

〔図書〕(計4件)

① 上野正道「アートの公共空間をひらく——プラグマティズムの学びへ——」荻宿俊文、佐伯胖、高木光太郎編『ワークショップと学び1——まなびを学ぶ』東京大学出版会、2012年、全272頁(197~223頁)

② 柏木恭典、上野正道、藤井佳世、村山拓『学校という対話空間——その過去・現在・未来』北大路書房、2011年、全292頁(49~52頁、67~72頁、89~93頁、151~175頁、180~220頁)

③ 上野正道「ポスト産業主義時代の学習活動を展望する——デューイと活動理論——」日本デューイ学会編『日本のデューイ研究と21世紀の課題』世界思想社、2010年、全216頁(120~131頁)

④ 上野正道『学校の公共性と民主主義——デューイの美的経験論へ』東京大学出版会、2010年、全408頁(1~408頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野 正道 (UENO MASAMICHI)
大東文化大学・文学部・准教授
研究者番号：50421277